

1. 校名「上智」と「ソフィア」の由来

「上智」という名称については、創設者の一人であるジェームズ・ロックリフ神父やヘルマン・ホフマン神父（初代学長）が書いた手紙に、神からの知恵を意味していると残されている。「神からの知恵」とは、ラテン語で“Sapientia”（サピエンツィア）で「叡智」を意味し、ギリシア語ではΣΟΦΙΑ（Sophia、ソフィア）という。カトリ



現在の正門の校章

“UNIVERSITAS SEDIS SAPIENTIAE”（ラテン語）は、「上智の座の大学」を意味する（Sedis は Sedes の属格形、Sapientiae は Sapientia の属格形）



1号館玄関

上部には校名が刻まれていた（現在は
ない）

字で「蘇比耶」と表記され、第2号（1927年発行）では“SOPHIA”となった。1932年に竣工した1号館校舎の玄関上には当時、大文字で“SOPHIA UNIVERSITY”と掲げられていた。

1935年以降は大学案内などのパンフレット類にも「上智大学」と“SOPHIA UNIVERSITY”が併記されるようになっていった。また1938年創刊の海外向け学術雑誌『MONUMENTA NIPPONICA』（モニュメンタ・ニポニカ）でも“SOPHIA UNIVERSITY”と紹介され、「ソフィア」という名称は国内外へと定着していった。

ック教会で聖母マリアを讃える祈りの中に「Sedes Sapientiae、上智の座」という言葉があり、創立当初の校名の説明に用いられている。現在の正門の校章には、“UNIVERSITAS SEDIS SAPIENTIAE”と刻まれている（写真左）。

しかし校名については当初、アルファベットで表記すると「Jochi」は「joshi」（女子大）と間違えやすい、仏教的にも感じるという異論も少なくなく、ついには校名変更も検討されたほどであった。

そのような中、1924年4月からギリシア語を教えていたヨゼフ・エイレンボス神父が学生に、「上智」とはギリシア語でソフィアであると教えると、学生は「ソフィア」という名称を校名につけて欲しいと要求した。ホフマン学長は当初反対していたが、それも長くは続かなかった。1925年、ローマに宛てた手紙で次の

ように書いている。「われわれは上智という漢字に片仮名でソフィアとルビを振ることに決めました」

1926年には、教職員・学生の親睦団体である学友会が雑誌を発行しているが、その創刊号のタイトルは漢



1926年に発行された学友会雑誌（左）と翌年発行の第2号（右）



1935年の大学案内

2. 校章

上智大学の校章は、羽ばたく鷲である。その鷲の胸には本学の標語である「真理の光」、ラテン語で“Lux Veritatis”の頭文字をとったLVが記されている。鷲は「太陽をめざしてまっしぐらに飛ぶ勇猛果敢な鳥」であり、校章は、真理の光を追い求める鷲の姿を象徴していることになる。



1914年頃から現在までの校章の変遷

“Lux Veritatis”という言葉は聖書にもなく、本学の創設者たちがなぜこの言葉を選んだのか記録は残っていない。しかし、1913年の秋にはこの校章が制作され、予科生は丸い帽子に、本科生は角帽につけていた。

3. 校旗

最初の校旗は青地に金であった【校旗 1】。1931年に制作され、1932年

の1号館落成式で初披露された。右図は、1939年に文部省から校旗の由緒について調査の依頼があり、その回答とともに模写で提出したものに沿っていると思われる。【校旗 1】は現存しない。

次に作られたのが蝦茶色に金の【校旗 2】である。1955年頃にペテル・ヘルツォク神父が制作した。しかしこの校旗には反発があり、1957年に青地に金色の【校旗 3】をルーメル神父が制作した。その年の先哲祭から使用し始め、1986年6月の上南戦まで使用された記録が史資料室所蔵の写真で確認できる。老朽化にともない、1986年に蝦茶色に金の【校旗 4】が制作され、同年10月の先哲祭で最初に使用され、現在もなお使用している。

なお【校旗 2】【校旗 3】については、史資料室にて保管されている。



最初の校旗の模写版



【校旗 1】

1931～1955年



【校旗 2】

1955～1957年



【校旗 3】

1957～1986年



【校旗 4】

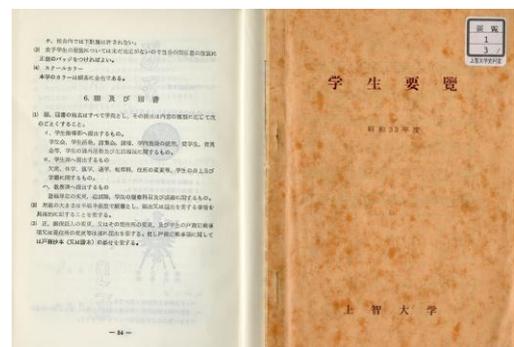
1986年～現在

4. スクールカラー

2013年、創立100周年を迎えるにあたって、スクールカラーや校章など、本学を視覚的に表現するビジュアル・アイデンティティ (VI) を整備し、学校法人上智学院として「ビジュアル・アイデンティティガイドライン」(VIガイドライン)を定めた。

本学創設後、最初にスクールカラーを青と白(聖マリアの色)としたのはホフマン初代学長といわれているが、正式な記録文書は残っていない。

スクールカラーについて、「本学のカラーは蝦茶に金である」と、はじめて明記されたのは1955年発行の『上智大学学生便覧』である。これは恐らく上述のヘルツォク神父による1955年の校旗変更に応じたものと思われる。しかしその校旗への反発とは裏腹に、スクールカラーは「蝦茶に金」という記述は残った。学生便覧は、1958年から『学生要

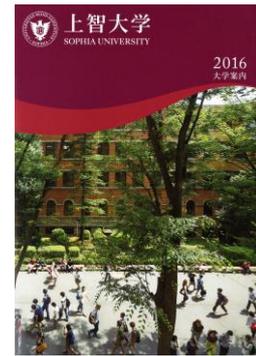


学生要覧(1958年)

スクールカラーについて「本学のカラーは蝦茶に金色である」と明記されている

覧』に、大学紛争を経た 1969 年からは『履修要覧』へと名称・形式が変わり、この時点でスクールカラーの記述はなくなっている。

現在もスクールカラーはえんじ色が引き継がれている。上述した VI ガイドラインの制定により、メインカラーを **Compassionate Claret** (コンパッションネイト クラレット)、サブカラーを **Wisdom Fruit** (ウィズダム フルーツ) と呼ぶこととした。本学は創立以来、キリスト教ヒューマニズムに基づき、叡智とグローバルな視点を備えた若者を育て続けてきた。そこに連綿と流れる私たちの想いを象徴するカラーが、**Compassionate Claret** である。また教育を通して若者に知識を授け、さらには世界をつなぐ叡智に導き、次の 100 年を展望しながら、この使命をいっそう進化させて行く。この決意をいきいきと象徴するカラーが **Wisdom Fruit** である。さらにこの 2 つのカラーを組み合わせたのが **Wave of the Future** (ウェーブ オブ ザ フューチャー) である。これは、私たちの姿と、叡智で世界をつなげてゆくという意志を表現したものである。制定後、大学案内、名刺、チラシ等さまざまな印刷物に使用されるようになった。



大学案内(2016 年)の表紙にも Wave of the Future を使用

5. 校歌

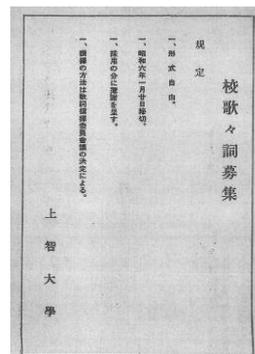
校歌は 1932 年に作成された。1928 年、上智大学は晴れて大学令により大学に昇格した。その時、校歌が母校愛に結びつくということから、校歌制定の機運が盛り上がった。

歌詞を学生から公募することになり、学友会雑誌『SOPHIA』5 号(1930 年発行)に歌詞募集の広告を出し、文学部哲学科の逸見貞男君の作品が選ばれた。「おお荘厳の学府」からの繰り返しの部分は、ドイツ語を教えていた宇多五郎教授が加筆、土橋八千太神父が全体を校閲修正した。

作曲はドイツ留学から帰国したばかりの作曲家山本直忠氏に依頼した。山本氏に依頼をした経緯については資料が残っていない。

歌詞には上智の校章である「鷲」と“Lux Veritatis”が使われている。学生は真理の光を目指し、ひたむきに突き進んで欲しいという想いが込められている。「荘厳の学府」はいかにも上智らしい往時の厳しさをあらわしている。完成した校歌は 1932 年の 1 号館落成式で校旗とともに披露された。

校歌は現在、入学式や卒業式などの式典で歌われるほか、オールソフィアンの集い、新入生オリエンテーションキャンプでは一部の学科で歌われている。また応援団の演舞披露の場である「荒鷲の集い」では、2012 年から校歌講習会も行われ、在学生の校歌に対する理解を深める活動へと発展している。



学友会雑誌『SOPHIA』第 5 号に掲載された広告(左)と同 6 号(1932 年)に掲載された校歌(右)

(2016 年 4 月)